

Introduction of scrolls in the collection of Kofukuji Temple Part 1

YOSHINAGA Takanori

This paper is an introduction to the materials in the collection of Kofukuji Temple. The results are part of an activity conducted by the Student Commons Casa of the Faculty of Humanities and School of Intercultural Studies at Kyoto Seika University.

The materials were deciphered by volunteer members from November 2021 to May 2022. 4 historical documents were deciphered and the results summarized.

Kofukuji Temple is the central temple of the Rokusai Nembutsu in Kyoto. The materials examined in this study have been used in the study of Rokusai Nembutsu in the past. However, they have not been fully utilized and have only been briefly introduced. This is insufficient not only for research on the Rokusai Nembutsu in Kyoto, but also for historical research on Kofukuji Temple.

In light of the above, it would be very significant for academic research if the materials were made widely available to the public. And we plan to continue our regional research in the future.

光福寺所蔵卷子本の紹介 一

吉 永 隆 記 YOSHINAGA Takanori

解説

本稿では、干菜山齋教院光福寺（京都市左京区田中上柳町、以下、光福寺）所蔵史料のうち、当寺の寺伝や由緒等を記した卷子本四点を調査・講読した成果について紹介する。

光福寺は、京都における六斎念仏の総本寺に位置付けられている浄土宗寺院である。六斎念仏については、近世初期の形態を維持した光福寺の干菜寺系、近世中期以降に広く展開した紫雲山空也堂光勝寺の空也堂系の二類型があり、しばしば対比されてきた¹⁾。空也堂系が芸能化を遂げた六斎念仏として、京都で広く信仰を集めた一方、干菜寺系は古い形態を保持しているとされる。この点について、山中崇裕氏は六斎念仏の宗教観や由緒の原型を再検討すべく、光福寺所蔵卷子本のうち『浄土常修六斎念仏興起』（以下、『常修興起』）に注目した²⁾。山中氏は、これまで内容の信憑性を疑われてきた『常修興起』の世界観や歴史観を丁寧に分析し、近世初期の六斎念仏布教に果たした『常修興起』の意義を再評価したうえで、その宗教観が中世的世界観に基づいていることを注視した。さらに山中氏は、光福寺所蔵の卷子本四点の比較検討を行い、それぞれの成立時期を明らかにして

いる³⁾。本稿で扱う卷子本の背景を知るうえで重要な成果であり、以下で改めて整理しておきたい。

光福寺所蔵の卷子本は、いずれも光福寺第五世・正慶による近世前期の写である。したがって、現存の写はいずれも近世のものであるが、『常修興起』の原テキストは、一四世紀後半までに成立していたという。次に、『浄土常行六斎念仏興起』（以下、『常行興起』）の原テキストは、光福寺開山・宗心によるもので、中世末～近世初期の状況を踏まえた内容とされる。この他に、近世前期に正慶がまとめた『書功』と『齋教院光福浄寺筆録』（以下、『筆録』）がある。これら卷子本四点については、山中氏の指摘する通り、内容の信憑性が低いことから、実は六斎念仏研究においても十分に活用されてこなかった経緯がある。したがって、光福寺所蔵の卷子本四点の全容を改めて翻刻・紹介することの意義は大きいといえよう。

翻刻にあたって、佛教学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究』（隆文館、一九六六年、以下、『民間』）に翻刻文が掲載されているものは、これと対照させ、異同があれば注記するようにした。なお、各卷子本の情報を次の通り整理した。

A、『浄土常修六斎念仏興起』（『常修興起』）

補足…刊本あり（『民間』ほか）、原テキストは一四世紀後半までに成立か。

B、『浄土常行六斎念仏興起』（『常行興起』）

補足…刊本あり（二〇二二年山中論文）、原テキストは近世初期成立か。

C、『書功』

補足…刊本あり（『民間』ほか）。

D、『齋教院光福浄寺筆録』（『筆録』）

補足…一部刊本あり（二〇二二年山中論文にて「諸縁起」・「當寺血脈」部分が翻刻）。

以上の卷子本四点のうち、B『常行興起』とD『筆録』については、二〇二一年に山中氏が論文で紹介するまで、まとまった翻刻がなかった。とりわけD『筆録』については、その全文の翻刻はなされていない。さらに、いずれの先行する刊本についても、テキストに従った全容（ルビや返り点ほか）を翻刻しておらず、

その構成や作成者の意図が削がれていることは否めない。

本稿では、紙幅の都合で全ての卷子本を一度に紹介できないが、前述の状況を踏まえ、これまで全文の翻刻がされてこなかった、D『筆録』の紹介を優先することとした。そして、C『書功』を併せて紹介することとし、残るA『常修興起』とB『常行興起』、各テキストの内容検討については、別稿にて紹介したい⁴。

註

- 1 田中緑紅『六齋念仏と六齋踊』（京を語る会、一九五九年）、山路興造「六齋念仏考」（『京都芸能と民俗の文化史』思文閣出版、二〇〇九年）など。
- 2 山中崇裕『浄土常修六齋念仏興起』にみる近世初期の六齋念仏の宗教性（『佛教学大学院紀要 文学研究科篇』第四三三号、二〇一五年）。
- 3 山中崇裕「光福寺蔵正慶写本にみる六齋念仏の寺院掌握と変容」（『宗教民俗研究』第三一〇号、二〇二一年）。卷子本四点の略称についても、本論文の整理に従った。
- 4 次号の『京都精華大学紀要』第五七号に投稿予定。

○凡例

・原則として、異体字・ルビ・改行・補注・闕字・平出等は、可能な限り原本表記のままとしている。そのため、不自然な表記があっても、そのまま掲載した。
 ・虫損・欠損については□で表記し、他史料等で補えるものは「」で補足した。
 ・『書功』については、『民間』の翻刻文と異同があるもの等に註を付すようにした。

○『書功』（卷子本）

書功

勅願所 光福寺六齋念佛は始祖法如の宗派にして

龜山院の御宇 文永年中に興起す

花園院の御宇 正和年中に官庫に納有る弥陀の像を

法如へ下し給ふて常行六齋念佛に勅誡下し給ふ後栢原院の御宇

永正年中に宗派の惣本寺との号を

勅許 下し給ふ

後奈良院の御宇

天文年中と

正親町院の御宇

天正年中に

金輪聖王天長地久御願圓滿

後陽成院の御宇

天下泰平國家安全

祈禱を勤へしと 勅命を下し給ふこれによりて

懈怠なき寺務なり

花園院御宇 正和四年に六齋念佛始祖法如入滅す

同御宇

文保元^丁年十月廿一日に謚法如大師と号す

二度観音薩埵は古^經東善寺より所持の像なり

秀吉文禄年中に靈像^并堂宇を除地へうつす

其後慶長年中に³

陽光院皇子智仁親王八條宮 祈願拜謝として

尊容の銚を再興し厨子を寄附有なり

天下秀吉宗心へ威有りて文禄年中に東川原除地へ

光福寺を移し干菜山と号し六齋念佛修る輩の支配許す

在判免状有り其恩謝として例六月廿五日毎に大齋會執行なり

今度此寺内へ書院⁴を建庭に山水の景し

内殿に釈迦の木像を寄附す爰に此寺の

記録を披見に右寺格依無相違遂書功畢

小野牛皮曼茶羅寺

天和^二戊載二月二日

随心院門跡大僧正俊海（花押）

〔三十^{（異筆）}}三歳〕

六齋念佛惣本寺

光福寺正慶^江

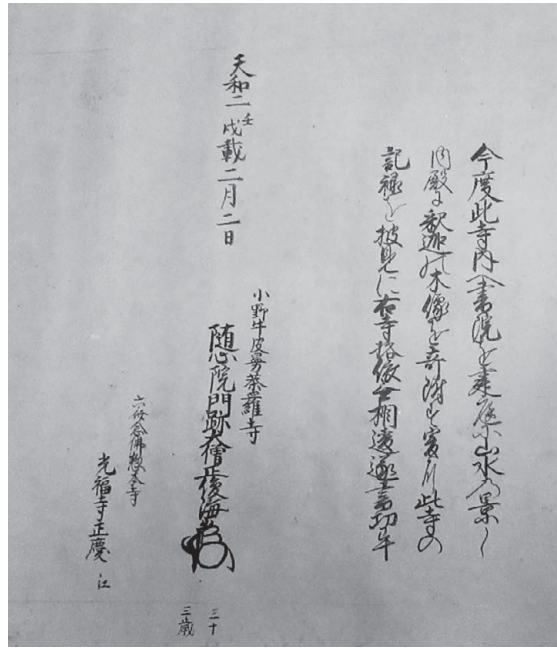
（異筆）

〔右一卷者随心院俊海前大僧正

之真跡也余覽畢筆斯者也

寶曆五乙亥年臘念七日

(九条尚美)
右大臣(花押)



【書功】 末尾、隨心院門跡俊海署判部分

- 註
- 1 「に」なし(「民間」)。
 - 2 虫損にて判読できず。『民間』の翻刻にて「跡」を補った。
 - 3 「其後慶長年中に」の一行、『民間』になし。
 - 4 『民間』では「寺院」。
 - 5 『民間』では「録」。

○『齋教院光福浄寺筆録』

(題簽) [] [] [] [] [] []
(齋教) 教院光福浄 [] [] [] [] [] []
齋教院光福浄寺筆録

勅願所光福寺者六齋念佛之藍觴而筑前國博多承天寺圓爾和尚後嵯峨院御宇寬元年中二京師二入玉ヒケル日相從ヒ禪門菩薩戒ヲ受ク西山善惠上人ノ孫弟觀智上人ノ門葉也俗姓ハ奥州伊達ノ一族也春日通常行院ニ寓居セリ山城國乙訓郡西ノ丘榎谷ノ東南安養谷ト云処口ニ東善寺ト云寺アリ此東善寺之中興也紅蓮社諦誓心阿道空法如和尚ト云始メテ六齋念佛ヲ興起セリ此時分ハ世上戰國ノ折カラナレバ遠近都鄙貴賤老若男女共ニ治亂盛衰シテ世ノハカナキ事ヲ心ニ觀スレトモ誰アツテ佛ノ道ニ志ス便リモテナクアサマシキ世ノアリサマヲ見ルニ付聞ニ付テセメテハ佛ノ道ノアルト云事ヲ几下ノ人ノ耳ニ聞センモ衆生濟度ノ種ニモヤト是ノ故ニ毎月六齋日ニ當テ鐘鼓ヲナラシ和讚ヲ唄シ高聲ニ念佛シテ世俗ヲス、メ衆民ノ市鄽ニ歌ヒ山野ニ獵スル者ヲシテ發心ノナカダチヲ得セシメ玉フ是ヲ六齋念佛ト稱ス又鐘鼓ヲ用ル所以ハ最勝王經ニ曰金光明鼓出ニ妙音聲一普至ニ三千大千世界一能滅ニ三途極難一矣又云ク鐘ハ三界ノ苦ヲ脱シ即菩提ヲ證ストナリ又六齋精進功德經ニ曰奉レ鐘得ニ妙香一音聲一奉レ鼓得ニ好音聲一受ニ天樂一是等ノ調声ヲシテ上有頂ニ徹シ下奈梨ニ通シ蟬飛蠕動ノ類ニ至ル迄ヒトシク清味ヲ受用セシメント欲スレバナリ大凡念佛

ノ節目ヲ分ツ事ノ四十八種有ル事ハ
 ノツカラ是レ四十八願ヲ表スル也中ニ
 ヒテ四遍白朱ト名ヅクル念佛有ルハ又
 是四住ノ煩惱ヲ治シテ實相ノ稱名ヲ顯
 ス事ヲ表スルナリ故ニ太鼓鐘ヲ打ナラ
 シ世間ノ老若男女或ハ心ヲ楽マシメ或
 ハ念佛ノ調声ノヲモシロキト心ニ感ジ
 テ佛ノ道ニ心ヲヨセシメンガ為ノ導ト
 セリ是レ毎月六齋日ニ念佛ヲ弘メシ開基
 ニシテ洛陽光堂ヲ兼帶シ玉フトゾ法如
 和尚ハ 後深草院 龜山院 後宇陀院
 伏見院 後伏見院 後二條院 花園院
 ノ御宇專ラ世ニナル貴僧也 龜山院御
 宇文永年中ニ興起ナリ 花園院御宇正
 和ニ癸年十月十五日官庫ニ納メ所レ有
 レ之ノ立像ノ阿弥陀ノ尊像ヲ玉フ守リ歸
 リテ拜レ之ニ閉目ノ尊像也則チ伽藍ニ安置
 シ本尊トス 勅ヲ下シ六齋常行念佛ノ
 号ヲ給ハル正和四年乙卯六月廿五日遷
 化ニテ 曆モ同御宇文保元丁巳年十月廿
 一日 朝廷ヨリ大師ノ号ヲ下シ玉ヘリ
 諡ニ法如大師ト一及ヒニ末期ニ一弟子禪阿空察和尚ヘ
 六齋念佛ノ奧祕ヲ傳ヘ夫ヨリ已來代々
 此宗ノ為ニ一派ト一空察和尚ハ 後光嚴院御
 宇貞治三^甲辰年十月二日遷化セリ是レ六
 齋念佛一流ノ第二世ナリ第三世ヲ來阿
 察源和尚ト云 後土御門院御宇文明十
 六^甲辰年七月三日遷化セリ第四世ヲ西
 阿信光和尚ト云 後奈良院御宇天文八
 年十一月二十日遷化セリ始テ齋教

院ヲ同處安養谷ニ創建シ為ニ開基ト一 後柏
 原院御宇永正年中ニ惣本寺ノ号ヲ 勅
 許ナシ玉ヘリ信光ノ弟子法室壽源ト云
 正親町院御宇天正三^乙亥年七月五日遷
 化セリ齋教院大二世ナリ三世ヲ三連
 社光譽上人圓阿月空宗心ト云宗心俗種
 ハ丹州桑田郡宇津郷ノ産ナリ曾祖父ヲ
 土岐武藏守ト云祖父ヲ土岐筑前守重安
 ト云嫡子土岐筑前守重度ト云宇津郷ノ
 城ヲ知レル故ニ宇津筑前守ト改ム織田
 信長公ノ命ニソムキタルニヨリ明智日
 向守光秀ニ被レニ追北一敗北ノ後蟄居シテ宇
 津重兵衛ノ尉ト改名ス嫡子宇津与市兵衛
 重元ト云行年十八歳ニシテ京都ヘノボ
 リ永祿四年ノ秋發心シテ齋教院法室壽
 源和尚ノ弟子トナリ宗心ト号ス此時分
 ハ壽源和尚暫ク洛陽光堂兼帶也故ニ光
 堂ニテモ為スニ一代ト一老後齋教院ニカヘリ住
 職セラル元來此齋教院ハ今出川相國寺
 ノ邊ヘ移シ又々後ニ東川原ニウツセシ時
 丹州桑田郡宇津郷ニ先祖土岐武藏守創
 建シタル所ノ武藏寺ヲ引移シ祖父重兵
 衛尉重度法名大行院道也居士祖母法池
 院妙蓮大姉ノ塔等ヲ移シ齋教院武藏寺
 ト号シ住職ス後ニ上京羽休山飛行院嵯
 地藏ノ瑞夢ヲ蒙リ彼ノ寺ヘ移リ天台宗ヲ
 改メ浄土宗六齋念佛ノ為ニ一派ト一西林寺ト
 号ス此ノ寺東川原ヨリ西ニ當リ林ノアル
 寺ユヘ西林寺ト改メ号スト也此ノ所ニ暫ク
 住居セリ四十九歳ノ時弟子慶真ヘ西林

寺ヲ附属シ再ビ齋教院へ帰り住セリ從

是レ西林寺ヲ為ニ末寺ト然ルニ文祿二年ノ春

衣更着ノ始メ比 太閤豊臣秀吉公東川

原へ鷹狩ノ御遊アリシ時高駕ヲ齋教院

武蔵寺へ被レ寄宗心ニ御對話シ玉ヒ發心

并ニ俗種ヲタツネ玉フ翌日宗心ヲ聚樂

ノ御所へ召ス宗心干菜ヲ献ズ 太閤微

笑シ玉ヒテ宗心へ望ヲタツネ玉フ宗心

後代ノ為ニトテ寺院ノ地ヲ希ヘリケレ

ハ則境内百間四方ヲ玉ヒ為ニ諸役ヲ免

シ玉フ終ニ一字ヲ建ス重テ 太閤六齋

念佛惣本寺干菜山齋教院光福寺ト号ス

ベシトノ上意ヲ玉フ故ニ武蔵寺ヲ止メ

テ光福寺ト改ムルモノナリ本堂建立願

主ハ單譽正慶也寛文十二年子十月十五

日大工下鴨ノ宮庄左衛門作棟札アリ

○宇津氏傳

清和源氏嫡流從四位上左馬ノ權ノ頭兼伊豫

守源ノ滿仲ヨリ五代ノ嫡孫從五位上出羽

守光國ノ後胤土岐武蔵守 住ニ丹州

重安 土岐筑前守 住ニ宇津ノ城ニ

重度 土岐筑前守又タ宇津後ニ宇津重兵

衛ト号ス住ニ宇津郷ニ一塾居

重元 宇津与市兵衛十八歳而京都ニ來

リ發心出家ト成齋教院法室壽源

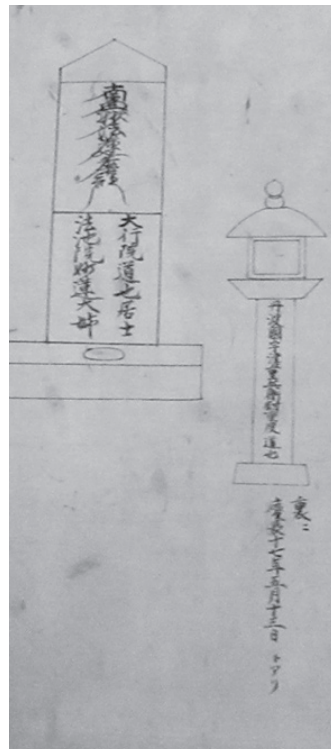
和尚之為ニ弟子一号スニ宗心一寛永三年丙

寅五月二日遷化

○宇津重兵衛ノ尉塔 此ノ塔ハ丹州桑田郡宇

津郷ニ所ノ有ル之武蔵寺ヲ此ノ地へ所ニ改葬一也
宇津ノ家ハ代々法花宗也

(墓図あり)



大行院道也居士ハ宇津重兵衛尉重度也
法池院妙蓮大姉ハ母也

○一條辰橋二度観音 立像千手御長

一尺一寸余

此尊像ハ八條ノ宮智仁親王ト号シ奉リ

太閤秀吉公ノ御猶子トナラセ玉フ此宮

ノ御裡第今出川ニアリシ時文庫ノ中ニ

安シ玉フ尊像也恵心僧都ノ妹公安養尼

公ノ守本尊也何タル所謂アリテヤ此ノ宮

ノ文庫ニアリケリ然ルヲ當寺齋教院ハ

西ノ丘安養谷ニ有リ之レ安養尼公へ縁アル寺

ナリトテ宗心へ附属シ玉フ所ノ尊像也

傳聞ソノカミ安養院ト云寺ニ安置シ玉

フ尊像ナリトテ則安養院ト云院号モ相

添附属シ玉フ処ニシテ當寺ノ塔頭安養

院是レナリ當寺本堂中興再建ノ時観音堂

來迎柱ニ用ヒタル金柱ハ此観音ニ附タ
ル桂ニテ是モ八條ノ宮ヨリ寄附シ玉フ処

ノモノ也猶觀音ノ縁起アリ永正九年太歲壬申林鐘如意珠日釋氏宜竹叟代二化主一製レ之ヲトアリ觀音堂建立ハ正慶也

○八條宮御傳

正親町院 御諱方仁御母ハ參議賢房卿ノ女

文祿二年正月五日崩御七十八

在位二十九年

誠仁親王

立太子号ニ陽光院一贈太上天皇

天正十四年薨後陽成院之御父也

智仁親王

八條宮一品式部卿関白秀吉公

為二猶子一寛永六年四月七日薨五十一母ハ新上東門院

忠仁親王

八條宮改ニ智忠一

忠幸

廣幡ノ祖正三位中納言

○八幡宮社 此社ハ丹州桑田郡宇津郷二

土岐筑前守城内ニ勸請シタル所ノ社也

本地阿弥陀如来ヲ安置ス傳ニ曰吉田正

四位下左兵衛佐卜部朝臣兼治ノ觀請ニ

シテ城中鎮護之祠也云

○宇津井 此井ハ丹州桑田郡宇津ノ城内

ニ八幡宮御鎮座ノ時社前ニ有レ之シ清水

ナリ八幡宮當寺へ御遷座ナシ奉ル時清

水モ共ニ引移シ當寺内ニ如ク先規掘レ之ヲ

宇津井一名水ニテ大寒暑ニモ不乾清水也

土岐家の傳曰九州宇佐八幡宮ノ神鉢ハ

大盤石ノ上ニ穴三ツアリテ平日清水沸

出即是八幡宮ノ神鉢也故ニ用ユ此ノ

謂レヲ以テ何國ニテモ八幡宮ノ社ニハ

清水アル事大事也ハ唯一神道ノ深祕

ノ由ナリ穴賢他言スル事ナカレ

○愛宕權現祠 此祠ハ齋教院鎮守之為ニ

勸請スル所ノ祠也元來愛宕山大權現ノ

御神鉢ハ天神七代伊弉册尊也此ノ神火ノ

神軻遇突智命ヲ化生シ玉ヒテ神去マシ

又故ニ産火ヲ忌ミ玉フ事也御本地ヲ地

藏菩薩トアガメ奉ル也

○大除ノ地藏 長六寸余

地一鉢分身ノ尊像也丹州宇津城内鎮守

ノ愛宕權現ノ御神鉢ナリ故ニ古來ヨリ

火除ノ地藏ト奉ルレ称也

火除地藏 立像長一

尺五寸 丸木作り也炎上ノ時灰

燼ノ中ニ曆々綿々トシテマシマシケル

ヲ取出シ玉ヒケレハ尊像ノ前ノ方御衣

ノ上ツマ焼焦ケレドモ全身少モ不損マ

シマス処ノ尊像也皆人實ニ火除ノ尊像

アリトテ弥仰キ奉ルモノナリ

○太閤秀吉公尊牌 本堂脇壇ニ安置ス慶

長三年 八月十八日薨去御位牌

豊國大明神雲山俊龍大居士

國泰院殿ト号ス當寺永代大檀越也故ニ

毎日茶湯靈供獻スレ之ヲ後代必シモ恭敬禮拜

等勿ニ怠慢一矣

○太閤豊臣秀吉公画像 黒色ノ素襖侍鳥

帽子小サ刀御扇子座像也筆者近江前司

藤原元信ト云者ナリト申シ傳フ此尊像

ハ秀吉公文祿二年春二月御鷹狩ノ時當

寺へ被レ寄ニ高駕ラ一シ時ノ尊影也則鷹狩ノ時

ノ御裝束也トナン當寺第一ノ什物也

○秀吉公許狀 當寺境内百間四方六齋念
佛惣本寺号之事ナリ其文ニ曰

昨日者登城ニ而万端物語互ニ悦喜候願
狀殘シ被レ置候通百間四方除地進候諸國
六齋念佛勤輩支配可レ被レ致候錢五拾貫文
進候右之趣申送又々面談可ニ申入一候以上
文祿式二月十二日秀吉御判

六齋念佛惣本寺

宗心坊^江

右之通御許狀下レ被

○安養尼公画像 花ノ帽子天台衣天台袈
娑ニテ珠数ヲ持玉フ安養尼ト申スハ惠

心僧都ノ妹公也城州葛野郡西ノ丘安養谷
東善寺之什物也此尼公此地ニ住居シ玉

フ故ニ安養谷ト号ス後ニ齋教院ヘ奉ル^レ安
尼公遷化ノ後遺骸ヲ太秦ニ葬ス是ヲ安

養塚ト云續本朝往生傳ニ曰ク比丘尼某者源
信僧都之妹ナリ也自ニ少年ノ時ニ志シテ求佛道ヲ 逐不^レ婚

嫁セ^レ雖^レ受^レ五障之身一猶明ニ^{ナリ}三諦之觀ニ^才学道心
共ニ越^レ其^ノ兄ニ^世ニ謂^フ安養尼ト^一念佛日ニ積^リ道心年ニ深^ク

臨終ノ異相不^レ違ニ甄^録一誠ニ是住ニ^處青蓮華之中ニ
者ナリ也

○將軍家御尊牌 當寺ニ將軍家ノ御位牌
有^ル之^レ由緒ハ 後水尾院ノ 皇后東福門院御

所關東ヨリ御入^内被^レ遊^シ時關東ヨリ
召ツレラレタル御家人ノ内ニ三宅玄蕃

ト云人アリ洛東岡崎村ニ住居セリ此三
宅氏ト當寺宗心ト俗縁ノ人ナリ故ニ當

寺六齋念佛ノ由縁ヲ或時言上シケリ依
レ之 東福門院御所ヨリ依^テ召^ニ參^リ六齋念

佛ヲ修シ達ニ^高聴^一ケレバ中ニモ殊勝ノ勤

行ナリトノ蒙^リニ尊命ヲ^一此ノ時 東照權現公ノ
尊牌ヲ安シ朝暮常行念佛ヲ於^ニ牌前^ニ勤

行可^レ仕^ル旨蒙^リ 仰^御内々ヨリ三宅氏御使ニ
テ蒙^リ仰^夫ヨリ為^ニ冥加^一 台徳院殿ノ尊牌

毛奉^レ安モノナリ三宅氏卒去ノ後當寺ニ
葬^ニ石碑アリ三宅淨心ト号ス

○知恩院起約狀 六箇條之趣^ヲ起約狀役者
連判狀也其文ニ曰

起約狀之事
一 本末之儀可^レ為^ニ支配^一事

一 年頭中元祝儀儀被^レ述候儀可^レ為^ニ無用^一勝手
次第之事

一 依^三時^ノ之由緒^ニ一寺格相續之事
一 出世寺ニ可^ク被^レ致候事

一 入院勝手ニ被^レ致其ノ外諸事届^ケ迫^ニ而
可然事

一 獨立寺ノ事
右六箇條者

勅願所且ツ六齋念佛一流之惣本寺獨立格
別之寺ニ付末代起約致置候則由緒書此ノ

方ニ取納置候猶於^ニ當山^ニ一差構無^レ之候右丈
室被^ニ申渡^一候狀永一紙如^レ件

常称院 九達書判
寬永十四歲 八月廿九日 忠岸院 源察書判

本覺寺 源譽書判

淨善寺

勅願所光福寺 良正院 天誉書判

○制札 豊臣秀吉公ノ時ノ制札朽損シ有
レ之文字等不見

○秀吉公御状 什物也其文ニ曰
從賀州一荷物召寄候人夫三拾人自其地一長
濱迄御越可被仰付一候先日申入候者令
祝着一候追而可申候恐々謹言

八月二日 羽筑秀吉御判

○一枚起請 知恩院靈巖和尚御筆
佛法山大巖院開基權蓮社靈巖雄譽松風

上人和尚判トアリ
○曼多羅 弘法大師ノ御筆

○當寺開山木像 座像一 尺四寸 紅蓮社諦譽心阿
道空法如大師ノ像也本堂脇佛壇ニ安ス

六齋念佛ノ開基也

○善導大師像 本堂脇佛壇ニ安ス

○圓光東漸大師像 同脇佛壇ニ安ス
○宗心和尚画像 當寺第三世三蓮社光譽

上人圓阿月空宗心和尚ト号ス

○光福寺境内 百間四方也西ハ白川道枝
橋通り限リ北ハ百間也東ハ田中村川筋

限リ西ハ百間也境内之中ニ田中村一乘

寺村へ通ル往還ノ街路アリ北ノ方ニテ
明地ノ処へ非人ノ如キ者来リ小屋ヲ立

住居タキ由告ル者アリ為用心一免除シテ

指置キヌ其後亦同類ノモノ来リ同ク住

居ヲ請ニヨリ亦許レ之ヲツイニ及ニ数箇屋一此

人他國ヨリ来リ屠者ノ一類ナリツイニ
穢多村ト成ル堺ヲ失ス而後武藏寺正立
寺豊光院へ境内ヲ分ケ令買得一西ノ方ハ
先年ノ大水ノ時川原ニナリ其後境目ヲ
失ス高野川堤限リナリト云傳フ

○東川原 當寺境内ノ字ナリ洛陽ノ東ニ
アル川ノ边ナル故シカ云ニハ非ス所ノ
字ナリ

○末寺

○西林寺 兼帶所也上京柳原西へ入町羽
休山飛行院毬ノ地藏西林寺ハ愛宕山ノ中興
開基慶俊僧都ノ開基也退轉ノ後光譽宗
心和尚依テ靈夢一中興ス

○鬱櫻寺 丹州栗田郡宇津郷ノ内浮井村
鶴林山鬱櫻寺開基宗心和尚鬱櫻寺之境
内ハ則宇津重兵衛尉重慶齋居セラレシ

屋敷也故ニ宇津ヲ鬱ニ改メ鬱櫻寺ト号
スル也此屋敷ニ桜ノ大木アリ故ニシカ
云者也俗ニ桜寺ト云ハ是也

○延命寺 西ノ京下片町ニアリ宗心開基
ナリ

○高圓庵 城州葛野郡岡村西山高圓庵ト
云開基隨翁道順ナリ 後陽成院御宇天

正十六年ノ開基也
○念佛寺 城州葛野郡下桂村念佛寺ハ
御水尾院御宇慶長十八年浄貞大徳開基

也
○浄土院 愛宕郡東山浄土寺村浄土院
後土御門院御宇明應二年浄休大徳開基

ナリ

- 阿弥陀寺 同处阿弥陀寺 後陽成院御宇應長九年慶譽玉芳大徳開基也
- 樂邦庵 愛宕郡紫野大徳寺門前樂邦庵ハ 明正院御宇寛永十二年良圓大徳開基生國ハ丹州桑田郡田原村ノ人也同國同郡同所淨欣寺龍傳和尚ノ弟子也
- 西蓮寺 愛宕郡紫野ノ北紫竹村西蓮寺後水尾院御宇寛永六年眞譽慶珍大徳也
- 珍ハ丹州桑田郡木住村湯淺氏也宗心和尚ノ弟子也
- 寶林庵 愛宕郡林村ニアリ 後水尾院御宇元和九年淨眞法師開基也
- 安誓寺 城州綴喜郡宇治田原禪定寺下村ニアリ 後水尾院御宇元和七年道寸法師開山也
- 西方寺 愛宕郡西賀茂鎮守庵村ニアリ 古來ハ大寺ニシテ開基ハ龜山院御宇文永九年眞濟也中絶セリ宗心和尚再興シ玉フ當寺末寺頭トス
- 安善寺 城州愛宕郡大門村ニアリ開基正保三年丙戌年靈三ト云僧也
- 地福院 葛野郡岡村高圓庵之末院也同國同郡ニアリ文録元壬辰年道順開基ナリ
- 開山忌 毎歳六月廿五日大齋會ヲ修行ス末寺登山座烈ス在々ノ百姓六齋講中ノ者共登山シ六齋念佛ヲ修行ス後世必^{ナカレヲコタルコト}勿レ 怠 當寺第一ノ勤行也
- 導師鐘 二面アリ是ハ六齋開基法如和尚ヨリ嫡々所^{テキ}ニ傳來スル^一之鐘也當寺第一ノ什物也古今又^ク無^キニ比類^一ノ靈物也

- 當寺元祖傳末之具
 - 金磬 二面
 - 太鼓 六箇
 - 六齋念佛奧旨傳授之祕書 一卷
 - 右尤祕藏ノ珍器也
- 後柏原院ノ^繪旨 六齋念佛本寺号ノ御繪旨也永正十六与七月朔日頂戴ス
- 後奈良院御宇當寺元來由緒書指上シ時ノ扣書一卷
- 開山ノ縁起一幅 横卷物也
- 羽休山西林寺縁起 一卷
- 天滿天神名号 豊臣秀頼公御筆
- 山越三尊弥陀一幅 東善寺什物ニシテ齋教院傳來物也筆者宅間法眼ト云傳ヘタリ
- 十三佛 恵心僧都御筆當寺傳來物也
- 庭作之事 抑山水庭作^ル事我朝ニ始ル事用明天皇御宇ニ天然^レ靈鷲山ノ^テ躰ヲ唐土カンヒ山ト云山ノ麓ニ寺ヲ立テ其庭ニ靈鷲山ヲウツセリ其庭ヲ後冷泉天皇^ニ圖ニ写シ唐土ヨリ取寄宇治ノ平等院ニ作り玉フト云傳フ其^ノ後^ノ庭ヲ南都東大寺ヘウツスト也當寺ノ庭ハ東大寺ノ庭ヲウツス所也^ト榎尾ノ明慧上人モ庭ヲ作り三尊石ト云石ヲ立テ朝夕焼香シ禮拜シ玉フ事アリ庭ヲ作ル傳ハ後世ニテ色々ニ云ヘド皆茶ノ湯者ノ附會ノ説ナリ^{マコト}實ノ傳ト云フハ只^一トナク其所々ニヨリ場所ノ廣セバニ有ル事也譬ヘバ向ニ山ヲ請タル庭ニ又山ヲ作レバ山ト山ト重リ出ルト云字ノ如シ何ホド恰好ヨク

作リテモ其家ノ主人家ヲ出ルナント、俗難ヲ云モノ也サニナクトモ向ニ老山ヲ見ヲ又庭ニ山アラバ鬱敷アルベシ惣ジテ如レ此ノ事要メ也傳ニハ只山裁ハ立花ノ如シ立花ハ山野ノ如シト云テ庭ノ躰ハ立花ノ如ク真中ニ心次ニ見越次ニ請次ニ流シ次ニ胴作り次ニ前置キ或ハ小心ナド、云様ニ夫々ノツリ合ヒ引張り恰好第一也其外ニ大命ナドノ好ミニテ不恰好成ル事アリトモ大命ノ指図ニソムカヌガ是又一ツノ傳也瀧ヲ必ズ作ルハ先ツハ風景ナレトモ元來ハ風景バカリニ非ス傳ニ瀧ハ谷也山ニテ谷ハ早キ所ヲ云陰ノ場所也山ハ高シ陽ノ場所也是レ陰陽合躰ノ心ヲ表スル事也山水ヲ庭前ニ移スハ慰事也天地自然ノ山野川流ニ法ト云ハ文盲野人ノ沙汰也乍然又風景ヲ好ムモ風雅ナレバ時ノ宜キニ可レ随フ茶湯ノ如ク露子ノ内ニ石高ニシテ老人貴人ノ若シアヤマチ等アレバ尤不レ宜無禮ノ至リ也故ニ椽サキノ踏石ニ椽ヨリニ番目ノ石ヲ客石ト云テ大石ニスル者也日本ノ古書記録ニ客人嶋ト云事アリ水中ノ寫ノ事也此嶋ハ石高ニナキヤウニ作ル事也猶此ノ餘ハ口傳ニ有ル事也是當寺ノ傳末也別ニ卷物アリ惣メ庭ヲ作ルニ嵯峨流ト云アリ四条流ト云アリ當寺ノハ又一流也

○當寺庭石 當寺庭石ノ内三ツノ石ハ元來ハ室町將軍義昭公永祿年中ニ二条勘

解由小路ニ御所ヲ造リ御庭ヲ作り玉ヒケル時細川氏綱ノ旧宅ニアリシ藤戸石ハ昔慈照院殿ノ御時花ノ御所ト云ニ立置レシ名石共ヲ引移シ御庭作ラレシ石共ヲ関白秀吉公聚樂ノ御所ヘ引移サレシ名石ノ内ナリシヲ宗心當寺ニ庭ヲ作ラレシ時拜領シタル石也一ツハ臥牛石ト云一ツハ片山石ト云一ツハ諸眉石ト云此石ノ形チ諸眉ノ烏帽子ニ似タル故ナリト云臥牛石ハ其形チ牛ノ臥タル如シ以上三石ハ宗心拜領ノ石ナリ此臥牛石ハ太閤御所御腰ヲ掛玉シ故後ニ腰掛石ト云ヘドモ本ノ名ハ臥牛石ト云也甚タ由緒アル石ニテ大事ノ石也

○當寺血脉

紅蓮社諸譽心阿道空法如大師
正和四乙卯歲六月二十五日遷化六齋念佛元祖也東善寺中興也

見蓮社慧譽禪阿空察和尚 元祖ヨリ
二代貞治三甲辰年十月二日遷化
白蓮社道譽來阿察源和尚 第三世也
文明十六甲辰七月三日遷化
照蓮社遍譽西阿信光和尚 第四世也
始テ齋教院建立シ玉フ天文八巳亥十一月二十日遷化齋教院開基也
因蓮社深譽音阿法室壽源和尚 第五世
ニテ齋教院第二世也天正三乙亥年七月五日遷化
三蓮社光譽上人圓阿月空宗心和尚

六齋念佛元祖ヨリ第六世齋教院第三世
光福寺開山也寛永三丙寅年五月二日遷
化也

得蓮社涼譽實阿眞慶和尚 元祖ヨリ第

七代光福寺第二世也元和六庚申年四月

九日遷化

澄蓮社眞譽上人廣阿慶珍和尚 第八世

光福寺第三世也寛永十一甲戌年七月七

日遷化

榮蓮社眞譽化阿宗圓和尚 第九世光福

寺第四世也延寶元癸丑年十一月二日遷

化也當寺開山宗心和尚ヨリ以來當山内

ニ葬ル石牌アリ

右筆記スル所ハ開山宗心和尚ヨリ已來

代々口授之趣不レ残書付後鑑ノ爲トス必

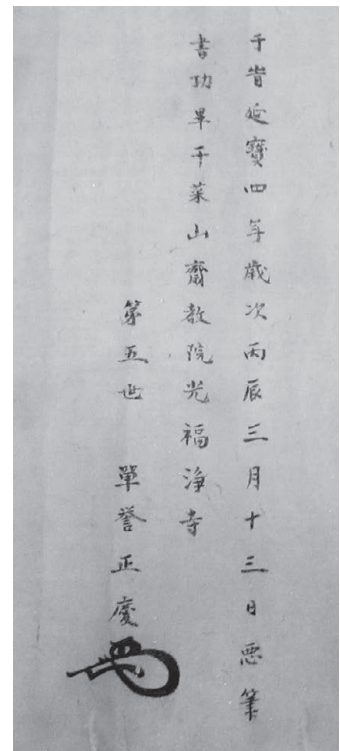
シモ紛失セサルヤウニ毎歳虫拂等可レ被

レ致者也開山和尚へ為御報恩也

于皆延寶四年歳次丙辰三月十三日悪筆

書功畢干菜山齋教院光福浄寺

第五世 單譽正慶 (花押)



『筆録』末尾、正慶署判部分

〔付記一〕

本稿の成果は、京都精華大学人文学部・国際文化学部スチューデントコモンズ Casa の活動の一環として光福寺を訪問した後、有志の学生を募集して同寺所蔵卷子本の翻刻・講読を行ったものの一部である。とりわけ本稿で紹介した『筆録』については、担当教員として吉永隆記が指導にあたり、翻刻の入力作業を分担したうえで、吉永が校訂・補足した。

作業にあたった有志学生と分担は次の通り。なお、『筆録』は二六枚の写真画像に分け、分担を割り振った。

篠原七彩 (219L062)	担当	九枚
尾栄克哉 (220L035)	担当	五枚
関田寿 (220L122)	担当	一枚
中井亮太 (220L146)	担当	一枚
宮下巧 (220L214)	担当	五枚
安原千乃 (220L223)	担当	五枚

〔付記二〕

卷子本の撮影や聞き取り調査では、光福寺様に多大なご協力をいただきました。改めて深く御礼申し上げます。